書評

井野瀬久美惠著

『植民地経験のゆくえ

――アリス・グリーンのサロンと世紀転換期の大英帝国――』

堀内隆行

『大英帝国はミュージック・ホールから』、『子どもたちの大英帝国』（文庫版『フーリガンと呼ばれた少年たち』）、『女たちの大英帝国』、『黒人王、白人王に謁見す』、……。一九―二〇世紀転換期のイギリス帝国について、井野瀬久美惠氏がこれまで色彩豊かな作品の数々を提示してこられたことは、改めて説明するまでもないだろう。その氏が既発表論文数本を加筆、修正しまとめられたのが、本書『植民地経験のゆくえ』である。九・一一、アフガニスタン、イラク、……と連鎖する昨今の国際情勢は、「帝国」の再検討が事態を読み解く鍵の一つとなる、という共通認識を生み出しつつある。しかし、こうした「帝国論」の多くは類型論的、抽象的であり、個々の人間が帝国において、どのようなネットワークをとり結んでいたのか、という疑問には対応していない。本書の意義はなかんずく、かかる観点において一般の帝国論に一石を投じていることにある。

本書の構成は次のとおりである。

序
第一章　帝国再考――植民地経験を問う意味――
第二章　ロンドンのサロン文化
第三章　インスピレーションとしてのメアリ・キングズリ
第四章　メアリ・キングズリを追悼する
――アフリカ協会の設立とその変質――
第五章　女たちの南アフリカ戦争
第六章　アイルランド国民の「創造」
――アイルランド史を書き換える――
結びにかえて――コモンウェルスへの道――

序は、一枚の集合写真をめぐる印象的な書き出しにはじまる。写真に写るメアリ・キングズリは一九世紀末、西アフリカを旅したが、その旅は行政官、宣教師、商人などの「文明化」志向と性格が異なっていた。「西アフリカでの経験をつうじて大きく変貌したのは、彼女が出会った西アフリカの人びとや彼らの社会ではなく、彼女自身であり、しかも旅のなかで、彼女は、西アフリカとそこに暮らす人びとを、イギリス（そしてヨーロッパ諸国）による『文明化』から守らねばならないと考えるようになったのである」（一四頁）。こうしたメアリの西アフリカ経験を引き継ぐのが、イングランド史家J・R・グリーンの妻であったアリス・グリーンである。アリスはそのことを通して、自身アフリカを「経

験」し、アイデンティティまでも再構築していった。本書の課題は以上の、「メアリ・キングズリからアリス・グリーンへとつづく植民地経験を基軸に、世紀転換期という時代、大英帝国という空間を再考」（一六頁）することである。

第一章は、ジェンダー、アイデンティティ、「シティズンシップ」（市民であること）に関する先行研究を個別に検討し、本書の基本的関心が、本国人に対する植民地経験のインパクトの問題にあることを明確化する。まず、中心（イギリス）が周縁（植民地）に与えた影響を静的、肯定的に捉えようとする、イギリス人の「恵み深き帝国」という語りの現状を示しつつ、この傾向に異議申し立てをしてきたジェンダー・スタディーズの研究史を振り返る。従来、イギリス帝国の歴史叙述は女性不在であるか、イギリス人女性（とくに行政官の妻）を極端な人種差別主義者として描くかであった。こうしたステレオタイプは一九八〇年代、メアリ・キングズリのような「レディ・トラヴェラー」の存在を軸に見直しがはじまるが、そこでは帝国主義と、ヴィクトリア期独特の「女性らしさ」との緊張関係が問題となった。今日では、性器切除などの慣習について現地の女性を救済しようとする、イギリス人女性の「母性帝国主義」も批判の対象となっている。この母性帝国主義について本書は、現地女性ではなく、イギリス人女性のアイデンティティ構築に与えた影響に注目する必要を説く。とくに、全体のテーマであるアリス・グリーンについては、アングロ・アイリッシュ（プロテスタントのアイルランド人）となることが重要であった。

以上の諸点をふまえて、議論はアイデンティティとシティズンシップの問題に移る。まず、帝国の消滅、EUの成立とともに「イギリス人」が陥ったアイデンティティ・クライシスの現状と対比しつつ、一九―二〇世紀転換期を選挙法改正など、シティズンシップが争点となった時代と把握する。ただし帝国と、女性のシティズンシップとの関係を論じるときは、植民地に与えた文化的、道徳的な影響力を強調する母性帝国主義、恵み深き帝国、あるいは「博愛主義の帝国」の構図に絡めとられないことが重要となる。そこで本書は、スーザン・ソーン、キャサリン・ホールなどの研究を紹介しつつ、「イギリス本国という中心（メトロポール）が植民地とのかかわりによって構築されていること」（五六頁）を認識する必要を説く。ことにアリスとメアリは、「選挙権を確保する以外のかたちで、『市民』としての自分を表現しようとしたミドルクラス女性」（五七―五八頁、傍点原文）として、格好の分析対象となる。本書は以下、アリスのアイルランド史執筆（一九〇八年の『アイルランドの形成と解体』など）に、メアリとアリス自身のアフリカ経験がどう作用したかを解明していく。

第二章は、甥の執筆依頼、資料提供にもとづくアリス・グリーンの伝記（一九六七年）を「解体」しつつ、そのサロンの性格を検討する。一八八三年、イングランド史家の夫J・R・グリーンと死別してまもなく、アリスはロンドンのケンジントン・スクエア一四番地にあった自宅にサロンを開く。当初、サロンのゲストは大半が亡き夫の友人の歴史家、出版者であり、このことに対応して、アリスも亡夫の著作の編集・改訂、イングランド史の執筆に活動の中心をおいていた。しかし、アリスはそうした立場に満足せず、とくに八四年、ガートン・カレッジの校長就任に失敗し

て以降は、「人格と知性をつうじた社会貢献の場として私的空間であるサロンを捉え、……『自分のサロン』を模索」（九六頁）するようになる。その結果サロンのゲストも、社会改革と「帝国への責務」を主張する自由党の若手議員、あるいはベアトリス・ウェッブなどのフェビアン社会主義者にシフトした。更に九四年には、アイルランド・ナショナリストのJ・F・テイラーもサロンに頻繁に出入りすることとなる。先述の伝記等は、このテイラーの存在がアリスとそのサロンをアイルランド問題に引き寄せた、とする。だが、アリスが「アイルランド人」としてアイデンティティを再構築していったことについては、テイラー以上に、九七年のメアリ・キングズリとの出会いが決定的に重要であった。メアリとの出会い以降一〇年間ほどは、アリスの単著公刊の「空白期」＝「試行錯誤の充電期」に相当する。この時期のアフリカ経験＝「どう生きるか」の模索を経て、アリスはアイルランド史執筆にシフトしていった。

第三章は、アリスにインスピレーションを与えたメアリ・キングズリの西アフリカの旅を検討する。メアリの二冊の著作（『西アフリカの旅』と『西アフリカ研究』）や講演は数多くの読者、聴衆を集めたが、従来の地理学はこうした「女性の経験」を排除してきた。そこで本章では、近年のフェミニズム歴史地理学を参照しつつ、西アフリカに関する「知の生産と消費」の問題を解明していく。メアリの旅は二度に及ぶが、とくに重要なのは白人未踏のオゴウェ川下流域に達した二回目（一八九四―九五年）である。この旅においてメアリは、ジョン・ホールト、ジョージ・ゴールディなど現地のイギリス人貿易商人の支援を仰ぎ、風景の「創造」、淡水魚の収集を行った。しかし、旅は全体として、「発見」志向というよりも、アフリカ人との友情と、その独自の宇宙観、世界観（「フェティッシュ」）に対する関心、理解とにポイントがあった。アリスも、メアリが「女らしさ」、ユーモアをもっていたがゆえに、「アフリカ人の個性」を尊重することができた、と評価し、ヨーロッパ／アフリカを文明／野蛮ではなく、物質的な文明／精神的な文化の対比と捉えることを学んでいる。ただしメアリ自身は、イギリス人がアフリカ人の「庇護者」となることを否定していない。他方、宣教師と「ミッション・ボーイズ」（ミッション教育を受けたアフリカ人）については、アフリカ人の「文化」の破壊者として厳しく批判した。また、メアリは一九〇〇年、リベリアの黒人A・P・カンフォー博士に宛てて、「アフリカのナショナリティ」を説いてもいるが、この手紙はエドワード・W・ブライデン、マーク・C・ヘイフォード師などのアフリカ人の賛同を得た。だが、メアリは同年、南アフリカ戦争に従軍し、ボーア人（オランダ系入植者）捕虜を看護中に亡くなる。

第四章は、アリスが一九〇一年、メアリを追悼することを目的として設立したアフリカ協会の歩みを辿る。アリスの手紙にもあるとおり、協会は当初、アフリカ人をメンバーとする西アフリカ支部構想、植民地行政官批判など、メアリの信念の継承を鮮明にしていた。しかし、協会が発行する『アフリカン・アフェアーズ』の創立五〇周年特集号（一九五一年）はこうした姿勢を批判しており、この間の変質が検討課題となる。いま一度設立当初の問題に戻ると、協会はメンバーの多様性、自由党との関係、人種、国籍、ジェンダーに差のない完全なメンバーシップなどを特徴と

していた。だが、内部には創立総会当日より不協和音があり、協会は土木技師のフレデリック・シェルフォードと元植民地行政官のハリー・ジョンストンの手によって、次第に植民地行政官等のディナー・クラブ化していく。この変質にアリスは〇七年以降、度々抗議行動を起こすが失敗し、一〇年代になると急速に協会自体への関心を失った。

第五章は、メアリとアリスにとっての南アフリカ戦争の意味を探る。一九〇〇年、メアリが亡くなると、ジャーナリストのフローラ・ショウは『タイムズ』に投稿し、「帝国の責務に殉じた愛国者」とメアリを称賛した。しかし、アリスはこの投稿に疑問を覚え、親ボーアというメアリの真意を正しく伝えていない、と反論する。更に、「メアリの死の意味を、いや南アフリカにおけるメアリ・キングズリの『生』の意味を見いだすために」（二四一頁）、セント・ヘレナ島のボーア人捕虜収容所に向かった。アリスはここで一ヶ月あまり、外国人義勇兵を含む捕虜にインタビューを行い、「ボーア人というナショナリティ」が覚醒しつつあること、南アフリカ戦争に「民族の戦争」の側面があることを理解するようになる。また、収容所の環境を改善し、イギリス人に対するボーア人捕虜の警戒感と不信感をとり除く重要性も説いた。ただし、アリスは捕虜の「男らしさ」の回復を重視し、ボーア人女性に対する目配りを欠いた点で、同時代のエミリ・ホブハウスなどとは対照的であったし、黒人の視点もなかった。しかし、こうした諸経験に加え、イギリス軍、ボーア人両陣営のアイルランド人が、親ボーア感情を共有しつつも、敵味方となって対峙する構図を知ったことは、アリスにとって重要な意味をもつ。アリスは、「南アフリカはアイルランドと同じである（アイルランド人はボーア人と似た状況にある）」と思い至り、アイルランド問題に関する認識を深めた。

第六章は、アリスのアイルランド史執筆を検討する。一八九五年、アメリカの出版社がイングランド史の教科書執筆を依頼してきたことを一つの契機として、アリスは次第に、アイルランド史の執筆に関心を移していく。背景には、「ナショナリティ」が危機に瀕した九八年のシェラレオネ（メアリも関与した「小屋税論争」）、アイルランド（「連合アイルランド同盟」の設立）の状況も存在した。一九〇八年の『アイルランドの形成と解体』以降、一〇作品を数えるアリスのアイルランド史は、物質的な文明／精神的な文化というメアリに学んだ対比を援用しつつ、アイルランド国民の形成力を、征服による帝国的拡大とは無関係の「文化（的統合）力」（「アイルランド国民の伝統」）に求める。この「文化力」は、「侵入する諸民族を融合し、国民に変えてしまう」ので、アリスの出自であるアングロ・アイリッシュもアイルランド国民に変貌し、「アイリッシュ・ナショナリティ」の再生に寄与した。こうしたアリスの解釈について、同時代の歴史家ロバート・ダンロップが恣意的と批判すると、アリスも「アイルランドの野蛮性の否定」を軸に反論を展開し、両者の間に論争が起こった。この論争を経て、アリスはアイルランド語資料の翻訳に関心を寄せるようになるが、二〇世紀、アイルランド国民はプロテスタント（あるいはアングロ・アイリッシュ）とカソリックに分裂し、アリスがくり返し強調した「ひとつの国民」という主張は裏切られていく。

結びにかえては、アリスのサロンの変化を辿りつつ、その「アイルランド国民の物語」のゆくえを展望する。一九〇〇年以降、アフリカ関係者、アイルランド・ナショナリストのゲストが増えたことで、サロンは帝国批判の集団に変化した。帝国批判はアイルランドの将来像の問題とも関連する。アリスは一八年以降の一連のパンフレットにおいて、アイルランドが「ひとつの国民」として、連合王国の枠内での自治でも完全独立でもなく、ブリティッシュ・コモンウェルスの自治領となることを提案した。しかし、アリスには一九一三―一六年、ナショナリストの武装闘争に関与した「逸脱」があり、このことを理解するには、元外交官のロジャー・ケイスメントとの交流を探る必要がある、と本書は提起する。ここで話は序の、一枚の集合写真をめぐる書き出しに戻り、またも印象的に締めくくられる。

本書の豊かな内容については、いくとおりものコメントが可能である。まず、同じ時期の南アフリカを専門とする評者にとっては、第四章のアフリカ協会の歩みがとくに興味深かった。同協会は長く、イギリスばかりでなく欧米のアフリカ研究をリードしてきたし、協会が発行する『アフリカン・アフェアーズ』はいまなお、アフリカ研究者に必要不可欠な学術雑誌である。しかし、評者の知るかぎり、協会と雑誌の問題に正面きってとり組んだ研究は、少なくとも邦語では存在しない。その意味で本書は、欧米のアフリカ研究、延いてはアフリカ認識の歴史を回顧する上で真に基本文献となり得る。また、第三章のメアリの西アフリカ経験についても、アフリカ人の反応を見ることによって、イギリス帝国史研究がしばしば陥る西洋中心主義の克服に一定程度成功しているといえよう。他方、第五章のボーア人観については、アリスと時代背景が異なるハンナ・アーレントと比較対照する（二六一―二六二頁）など、整理の仕方には若干疑問が残る。[1]

次いで、本書のタイトルともなっている「植民地経験」に移りたい。本書が指摘するとおり、イギリス帝国史研究の問題点の一つは、帝国支配が植民地に与えた影響に比して、移民などいくつかのテーマを除き、本国に与えた影響をほとんど考察してこなかったことにある。他方、今日では、イギリス国内史の研究者を中心に、階級、ジェンダー、シティズンシップなどのテーマについて、国内史と帝国史を結節しようとする動きも盛んである。[2] この動きはカナダなど白人定住植民地／自治領史の研究者にも影響を与えており、「ブリティッシュネス」と帝国の関係を問う「ブリティッシュ・ワールド」の研究動向に帰結している。[3] しかし、国内史と帝国史の結節、「ブリティッシュ・ワールド」双方の研究とも、本国に対する帝国支配の影響について、十分に意識しているとはいえない。こうした歴史研究の現状とは対照的に、ポストコロニアル、カルチュラル・スタディーズの立場に立つ研究者は、より意識的に、「周縁」とのかかわりが「中心」の構築に資してきたことを解明しようとしている。[4] だが、この種の研究には、実証性、具体性などの側面で問題点が残ることも事実である。本書の植民地経験の議論は、かかる諸般の研究を渉猟しつつも、その長短をよく認識し、本国の人間にとって帝国とは何を意味したか、という問題を具体的に追究した点が独創的であるといえよう。このことは、本国人のオリエンタリズム、帝国意識を批判するばか

りで終わってしまう、一部の研究の硬直した状況を打開し、広くヨーロッパ・アイデンティティと他者との関係を考察する上でも力となり得る。

ただし、そこで問題となるのは、メアリ、アリスという個人のネットワークを検討することと、「世紀転換期という時代、大英帝国という空間を再考」することとの関係である。確かに、「プライヴェートな問題はパブリックな問題と確実につながっている」（二二一頁）はずであるし、「アリス・グリーンを有名なサロンの女主人に押しあげたものこそ、まさしく、世紀転換期という時代であったといえるかもしれない」（九二頁）という主張も首肯できる。しかし、メアリ、アリスの社会的、時代的影響力については、第三章でメアリの著作の読者、講演の聴衆を検討し、第六章と結びにかえてで植民地経験の「ゆくえ」を展望するものの、なお判然とはしていない。また、帝国の枠組を脱することができなかった二人の時代的限界についても、考察は不足している。評者の考えでは、一つの打開策は、メアリの西アフリカ「間接統治」論（イギリス人商人が沿岸部の現地人の協力を大々的に仰いで統治する、という構想。一八五頁）と、アリスのアイルランド「自治領」論との関係を、西アフリカ史、アイルランド・ナショナリズムに関する先行研究の整理も含めより綿密に探ることにある。そうすることによって、世紀転換期イギリス帝国史上の二人の配置も一層明確になったのではないかと思うが、難しい問題である。

とはいえ、こうした問題点は本書の価値を減じはしない。くり返しになるが、本書の意義はなかんずく、個々の人間が帝国において、どのようなネットワークをとり結んでいたのかを具体的に追究したことにある。この追究を下支えするのは、あとがきにもある徹底的にアーカイヴァルな作業である。とくに、第二章のアリス・グリーン文書等の分析は感銘深い。本書は、ジェンダー、シティズンシップなどの先行研究に対して、新しいシェーマを提示するものではない。そうではなく、メアリとアリスのネットワークをきわめて具体的に検討することによって、女性参政権運動ばかりが女性とシティズンシップの関わりではなかったこと、延いては女性がジェンダー以外の多様なアイデンティティを抱えていたことを立証しようとしているのである。

おわりに、以上の植民地経験の議論が、井野瀬氏の学際的、国際的な共同研究の成果であることを付言したい。氏はこれまで国内外において、英文学、人類学、地域研究など異分野間の交流に力を尽くしてこられた。本書の内容も、そうした成果に負うところが少なくない。例えば、本書の基本的方法は人類学者との共同研究（栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験――人類学と歴史学からのアプローチ――』人文書院、一九九九年）に拠る部分が大きいし、アフリカ女性史、市民社会などに関する国際シンポジウムも、本書に多大なインスピレーションを与えたものと思われる。アーカイヴァルであると同時に学際的であり、かつ問題意識を豊かに含んでいる点に、本書の魅力はある。本書が一般の帝国論をはじめ、帝国と植民地をめぐる夥しい出版物に飽き足りない読者に広く読まれることを念じつつ、筆を擱きたい。

（付記） 本書の内容は、M. Strobel, *European Women and the Second*

British Empire, Bloomington and Indianapolis, 1991（井野瀬久美恵訳『女たちは帝国を破壊したのか――ヨーロッパ女性とイギリス植民地――』知泉書館、二〇〇三年）とも密接に関連している。『史林』八七―一（二〇〇四年）の金澤周作氏の紹介とともにご参照いただければ幸いである。

① 評者の考えでは、南アフリカ（のイギリス系入植者）とイギリスのボーア人観は、帝国支持／批判、親／反ボーアの二つの軸によって、四つに大別することが可能である。この分類に従えば、アリスは帝国批判の親ボーア派となり、同時代の、帝国支持の親ボーア派、帝国批判の反ボーア派（社会的、時代的影響力を考えると、とくに前者）との比較対照こそ必要であったと思われる。その意味では、レディ・サラ・ウィルスン、レディ・エドワード・セシルなど、帝国支持の反ボーア派との比較対照（二五三―二五四頁）も、やや迂遠な印象を免れない。

② 例えば、D. Cannadine, *Ornamentalism: How the British Saw Their Empire*, Allen Lane, 2001（平田雅博・細川道久訳『虚飾の帝国――オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ――』日本経済評論社、二〇〇四年。）

③ 例えば、C. Bridge and K. Fedorowich (eds.), *The British World: Diaspora, Culture and Identity*, London, 2003. 南アフリカ史研究と「ブリティッシュ・ワールド」の関係については、拙稿「一九世紀末ケープ植民地とヨーロッパ・アイデンティティ」『人文知の新たな総合に向けて』（二一世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書I〔歴史篇〕）、二〇〇四年、三七七―三七八頁。

④ 南アフリカをめぐっては例えば、A. Lester, *Imperial Networks: Creating Identities in Nineteenth-Century South Africa and Britain*, London, 2001; Z. Magubane, *Bringing the Empire Home: Race, Class and Gender in Britain and Colonial South Africa*, Chicago, 2004. スチュワート・ホールの「黒いイギリス人」については、井野瀬久美恵「『イギリス』を創り直す――ブリテン、帝国、ヨーロッパ――」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、二〇〇三年、二六三―二六六頁。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程　　）

（A5判　四七二頁　二〇〇四年三月　人文書院　四八〇〇円＋税）